

2026 年 3 月 25 日

デジコンしものせき 2025 報告書

1. 概要と目的

デジコンしものせき（以下デジコン）は、下関の将来を担う若者の発想力・実行力を活かす人材育成モデルを構築するため、地域課題の解決をテーマとするイノベーション創出型コンテストである。下関市が進めるスマートシティ推進の中でフォーカスされた5分野の1つ、「教育・人材育成」の事業として位置づけられる。

参加者は、講義や専門家からのフィードバックを通して下関市の社会課題への理解を深め、解決策の発案や、それを実現するためのソリューションの試作品開発をおこなう。

今年度のテーマは「市民の健康寿命をのばそう！健康意識を変えよう！」である。前年度と同様に、単位互換制度「Aキャンパス」として梅光学院大学にて実施した。

目的

1. 地域課題に、ITやデジタルの力で取り組む意欲のある人材の育成
2. 地域課題に対して他人事ではなく自分事としてとらえていける姿勢を身に着けること
3. 課題に対しデジタル技術を活用した解決アイデアを考える力を身に着けること

2. 企画・運営

運営

下関市スマートシティ推進協議会（下関市企画課） 向尾・正村・松井

デジタル版地域おこし協力隊 勝谷隊員

【担当教員】梅光学院大学 特任教授 吉島様

特定非営利活動法人STEM Leaders 理事長 村重、学生メンター（渡邊・峯石・池上・嘉数・久保・坂口・黒田・真城）

協力

【ヘルスケアに関する有識者】

- 下関市立大学データサイエンス学部 講師 松浦様
- 下関市立大学看護学部 副学部長 塚原様
- 株式会社サンキュードラッグ 経営企画室長 藤井様
- 特定医療法人茜会（西部地域包括支援センター所長） 大野様
- 下関市 健康推進課 山中保健士

【IT企業】

- 合同会社UTAGE. WORKS 代表社員 川嶋様
- 合同会社山口商店 代表社員 山口様

【オブザーバー】

- 東亜大学 副学長 瀧田様

3. 参加者

全 30 名。※途中離脱者 4 名を除く。

下関市内の大学生：30 名（うち A キャンパス対象者 9 名）

- 下関市立大学 24 名
- 梅光学院大学 5 名
- 東亜大学 1 名

4. 主な活動内容

2025 年 10 月 4 日（土）のキックオフから 2026 年 1 月 10 日（土）の最終審査会までの約 3 ヶ月間、各チームで毎週会議を開催しながら、有識者へのヒアリングや勉強会を通じてソリューションの検討を行った。

2025.10.04 キックオフイベント

前半は、今回のテーマである「健康寿命・健康意識」について、有識者によるトークセッションが行われた。後半は、下関市の健康課題を用いたチームでのアイスブレイクや、課題のアイデア出しなどのワークショップが実施された。初対面のメンバーが多いなか、活発な意見交換を行う姿が見られ、各チーム 1 人以上は有識者へのヒアリングを取り付けた。



2025.10.25 中間発表①

第1回目の中間発表では、各チームの現時点での問題意識や取り組みたいと考えている課題から、解決するためのソリューションアイデアまでを発表した。有識者の方々から、現場経験者ならではの意見や、アイデア実装の手法といったさまざまな観点によるフィードバックをいただいた。終了後は、引き続き有識者へ質問を行ったり、フィードバックの活かし方や今後の活動計画についてディスカッションしたりと、活発なチームアクティビティが行われた。



2025.11.22 中間発表②

前回の中間発表から約 1 ヶ月、各チームは有識者からいただいたフィードバックを活かし、課題の深掘りやソリューション案の再検討を行ってきた。2 回目の中間発表では、自分たちが作るソリューションの具体案について発表。有識者からは、前回と比較し、よりビジネス的観点や現場への導入可能性にフォーカスしたフィードバックをいただいた。その後は引き続き各チーム内でのディスカッションや有識者との対話が活発に行われた。

2026.01.10 最終審査会

全 6 チームによる発表が行われ、厳正なる審査のもと受賞チームが決定された。

各チームの発表内容

チーム	ソリューション名	概 要
A	ROKO RHYTHM	運動とリズムゲームを掛け合わせ、デバイス内蔵カメラを用いてロコモティブシンドローム ¹ を予防するアプリ。
B	しもまちヘルス	健康状態を記録・スコア化・可視化（アバターや将来予測）をすることで、行動変容を促すパーソナル健康管理アプリ。
C	エクマチ 〜エクササイズ・マッチング〜	診断機能で条件に合う運動仲間・場所をマッチングし、運動の先にある楽しさを提供するアプリ。
D	Kuchi Check	公式LINEを活用した口臭リスクチェック診断。口臭を入り口に健康意識を高め、行動変容を促す。
E	Ashi-Miru	インソール搭載のセンサーにより、足裏データの分析・可視化を行い、最適化された運動を提案する。
F	ハグッキー	AIカメラのリアルタイム判定により、正しい歯磨きの習慣を身に付けられるアプリ。歯ブラシレコメンド機能も搭載。

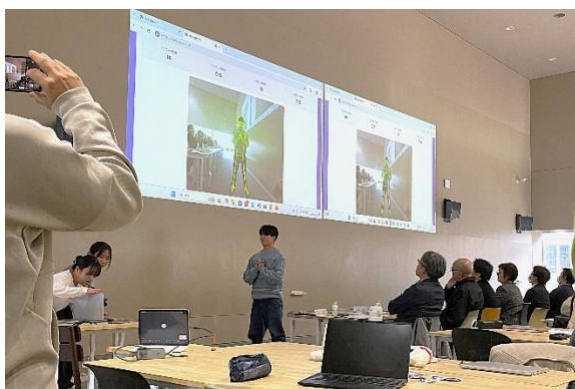
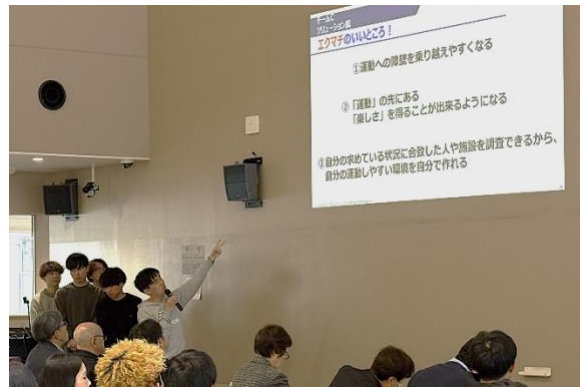
< 審査結果 >

最優秀賞：チーム D

的確な課題設定や「口臭」というテーマのユニークさ、試作品により技術的な実現可能性が確認できた点が高く評価された。

審査員特別賞 － サンキュードラック賞：チーム B ／ せきまる賞：チーム F

¹ ロコモティブシンドローム…運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態



2026.02.19 最優秀賞受賞チームの市長訪問

最優秀賞を受賞したチームDのメンバーが下関市役所を訪問し、前田市長にソリューションを提案したうえで、実際にご自身のスマートフォンで試作品を体験いただいた。

前田市長からは、年々ソリューションのレベルが上がっている点に言及し、「(試作品の利用) ハードルが低く、誰しも気になる口臭を入り口にするというのは、今まで考えたことのない盲点だった」と若い世代ならではの着眼点や、行政の考え方で施策を提案した点を称賛いただいた。



2026.03.10～11 最優秀賞チームの東京企業訪問ツアー

最優秀賞品として、チームDに首都圏の有名企業への訪問する1泊2日の研修旅行を提供した。(企画課職員随行)

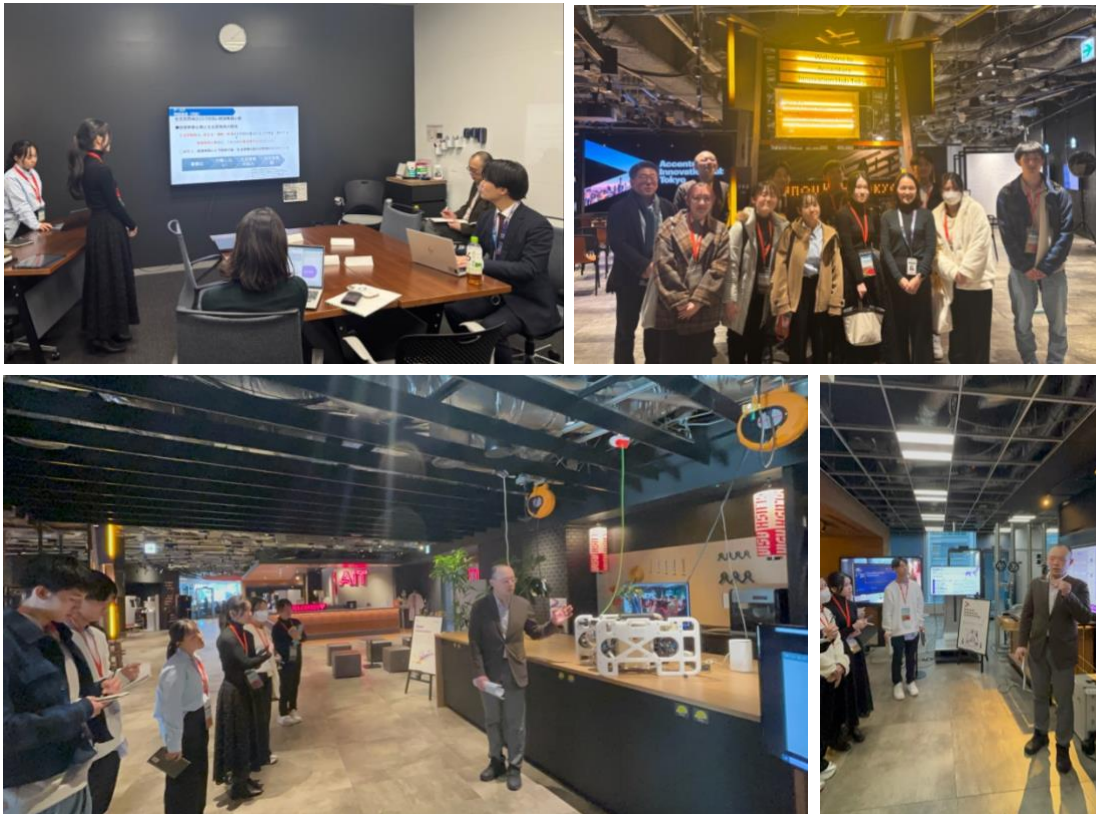
訪問企業は3社(①アクセンチュア株式会社、②株式会社Kumanomics、③日鉄ソリューションズ株式会社)である。

日程表(概略)

日	企業名	訪問施設	講師
3/10	アクセンチュア株式会社	アクセンチュア・イノベーション・ハブ東京	坂井田大悟様 鈴木一輝様 宮崎愛莉様
3/11	株式会社Kumanomics	虎ノ門ヒルズ Glass Rock	橋本直樹様
	日鉄ソリューションズ株式会社	日鉄ソリューションズ本社	西村世大郎様

アクセンチュアでは、「アクセンチュア・イノベーション・ハブ東京」にて、最先端のデジタル技術を活用したプロトタイプ展示を見学し、データやAIを用いた課題解決の

具体的な事例に触れた。また、参加者はソリューションについてフィードバックを受け、「健康に無関心な層へのアプローチには、日常で使う既存サービスに自然に組み込む仕組みが重要」「プレゼンテーションはキーワードで構造を理解して話すことが大切」など、実務視点の助言を得た。「使う人の立場に立ったものづくりこそが価値の源泉である」という気づきは、全員に共通する学びとなった。



Kumanomicsでは、企業・行政・NPO・学生など多様なセクターが集い、社会課題解決のプロジェクトを共創するコミュニティ拠点「Glass Rock」を見学した。「クロスセクター」という考え方に触れ、一組織・一視点では解決できない地域課題に対して、異なる立場の人々が議論し合う場をデザインする重要性を学んだ。また、ソリューションを実装する際には「誰が得をするか」という視点で資金調達を考えることや、行政の政策方向に沿った企画を設計する必要性についても助言を受けた。



日鉄ソリューションズでは、スマートシティ構想や、健康データを活用したヘルスケアソリューションについて説明を受けた。「病気になる前の健康時のデータが存在しない」という医療データの課題や、企業版ふるさと納税を活用した地域のデジタル産業振興の取り組みは参加者に大きな驚きを与えた。各チームのソリューションに対しては「保険会社が出資元になり得る」「まず成功事例をつくりターゲットを絞ることが重要」など、事業化を意識した実践的なフィードバックをいただいた。



5. 参加者アンケートによる効果検証

実施目的の効果や課題を検証するため、デジコン終了後、参加者アンケートを実施した。

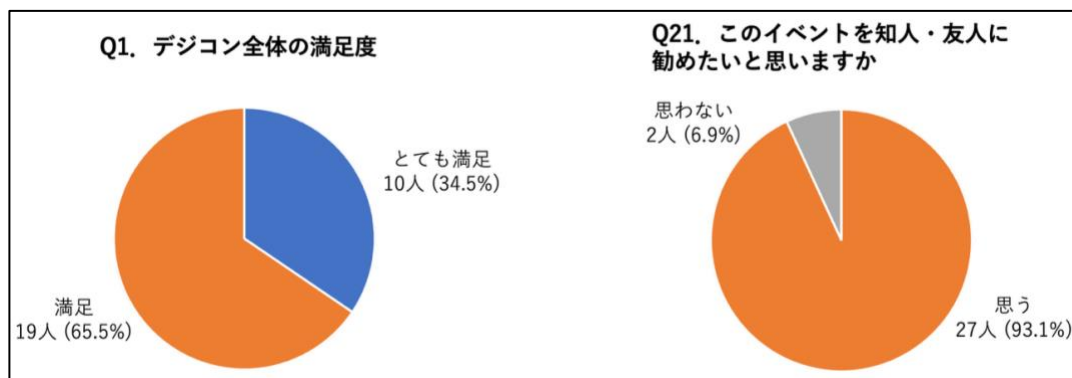
● デジコンしものせき 2025 の総合評価

デジコン全体の満足度は肯定的な評価が 100%を占め、イベント推奨度は 93.1%と極めて高い水準を獲得した（Q1・Q21）。昨年度に対して、どちらも評価は向上し、自由回答では具体的に言語化するコメントが増加した。

デジコン全体の満足度を押し上げた要因として、以下が挙げられる。

- ・課題発見から試作品開発プロセスの体験とその達成感
- ・有識者・多様な人との交流機会
- ・運営やメンターのサポート体制

デジコンを通して約 9 割の参加者が、地域課題に対する意欲の向上やデジタルスキルを実践的に獲得し、本来の目的を達成できたといえる。

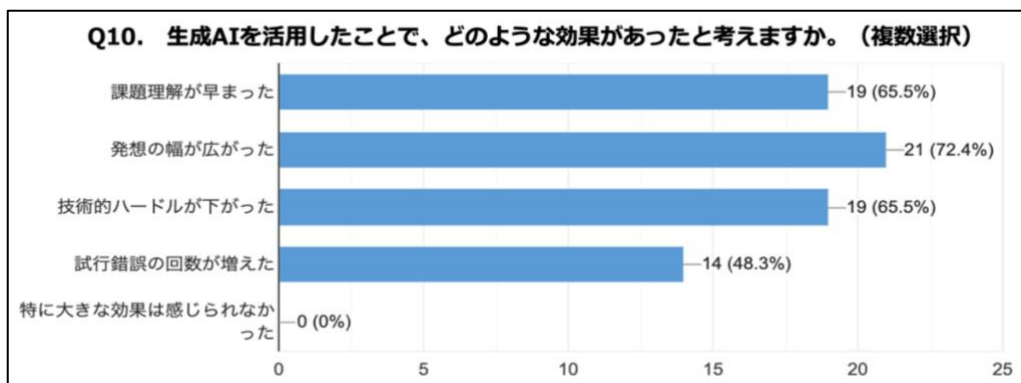


● デジタル技術の実践を通じた参加者の意識変容とスキル習得

デジコンの目的である「地域課題の自分事化」や「デジタルの力で課題に取り組む意欲の育成」に関して、参加者の 96.6%は下関市の健康課題に対する興味・関心を高めた。自由回答では、ロコモティブシンドローム¹や歯周病が全身の健康に及ぼす影響への驚きとともに、「自分が歳をとった時に気をつけたい」という声が挙がり、地域課題を自身の将来に直結する身近な問題として捉え直す姿勢への変容が確認できた。

デジタル技術の活用に関して、参加者の 96.6%が新しいものを生み出す視点が身についた（Q7）。また生成 AI により、参加者の約 7 割が発想の幅が広がったと回答し、生成 AI が課題理解の早期化や技術的ハードルの低下に寄与したことが示される。

¹ ロコモティブシンドローム…運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態



参加者はプログラミングやAI活用スキルにとどまらず、情報整理や課題定義のプロセス、論理的思考力、チームでの会議の進め方など、社会実装に不可欠な実践的スキルを獲得するという大きな成果を得ている。

● チーム活動や運営サポートの評価と改善

チーム活動への満足度は概ね高いが、一部メンバーの途中離脱・非協力的な姿勢・大学間の連携不足による特定メンバーへの負荷集中が、チーム活動の士気を低下させた事例が確認された（Q12・Q13）。

運営およびメンターに対する満足度は肯定的な評価が100%を占め、昨年度から11%向上した。特に、適切な距離感での助言が高く評価されていた（Q16）。一方で、チームによる介入度合いのばらつきが指摘されており、次回に向けたサポート基準の標準化が運営上の課題として挙げられた（Q17）。

また、参加者の更なる成長機会として、生成AIのプロンプトやプログラミングの講座・他チームとの交流機会増加を求める声が多く寄せられた（Q11・Q15）。デジコンの目的であるデジタル技術活用を、参加者全員が実践できるような改善が必要である。

● 創出されたソリューションの継続と次期展開に向けた展望

デジコンで創出されたソリューションについて、約8割の参加者が主体的な実施やサポートでの関与等、プロジェクト継続に意欲を示した（Q18）。さらに、次期開催に向けて参加者やメンターとして再参加を希望する声も寄せられ、スマートシティ推進に寄与するコミュニティが形成されつつある（Q19）。また、健康分野以外の新たな課題として、環境問題・教育・経済活性化等が提案され、地域課題への多面的な関心が確認できる（Q20）。

デジコンはアイデア創出にとどまらず、社会実装に向けた原動力として機能しているといえる。今後、プロジェクト継続希望者をSTEM Leadersや関係機関と連携し、デジコンで創出された人材とその意欲を社会実装へ直結させるよう取り組む。